

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」^{ほうそうげんこう}放送原稿（8月22日（金）放送分）

FMラジオ ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。^{か ごしまけんりつあまみ と}鹿児島県立奄美図書館^{しよかん}です。

今朝は、「図書館アラカルト」と題して、「郷土コーナーの偉大な先人たち」についてお話しします。

奄美図書館の2階には、奄美図書館を特長づける特設コーナーがあります。それが「郷土コーナー」です。

平成21年に、奄美図書館が^{こまた}小俣町から現在の^{ふるた}古田町に新築移転したときに、奄美群島にある県立図書館として運営する上で、四つの基本方針を立てました。一つ目は、奄美の拠点図書館として県民の皆さんへの読書サービスと12市町村の図書館・公民館図書室の支援を行うこと。二つ目は、初代分館長 ^{しまおとしお}島尾敏雄 氏の文学や民俗学に関する情報発信を行うこと。三つ目は、人生を豊かにするための生涯学習の振興に寄与すること、そして四つ目が、奄美の自然や歴史・民俗、郷土の先人、日本復帰運動等の貴重な郷土資料を可能な限り収集し、群島内はもとより国内、海外の方々に紹介することです。

この四つ目の方針に沿って設置されたのが「郷土コーナー」です。この部屋の右手には、奄美群島の日本復帰運動に関する様々な資料がガラスケースの中に収められています。左手には、奄美・沖縄の自然・歴史・民俗・^{たまたみ}島唄・文学などに関する本が5千冊納められた本棚が並んでいます。その奥の壁には、^{たまたみ}畳4畳ほどの江戸時代の奄美大島の地図が展示されています。そしてこの部屋の正面に、奄美の文化を代表する5人の先人たちが誕生順にパネルや著作・遺品などによって紹介されています。日本の法律界の先駆者と言われる^{もとにしんぐま}泉二新熊 氏、日本にはじめてロシア文学を紹介し奄美の日本復帰運動を支えた^{のぼり}昇曙夢 氏、日本復帰運動を導き奄美の芸能研究を深めた文^{かざり}英吉 氏、奄美群島日本復帰運動の父と言われた^{いずみ}泉^{ほうろう}芳朗 氏、奄美の文化と風俗を愛したケンムン博士^{えばらよしもり}恵原義盛 氏の5人です。今日は、時間の都合で、そのうちの3人を取り上げます。

まず、^{たつごう}泉二新熊氏は、明治5年、大島郡龍郷村、現在の龍郷町に生まれました。学問への志が高く、名瀬高等小学校から東京の中学校に学び、鹿児島的高等中学校、熊本の第五高等学校を経て、東京帝国大学法科大学^{どくほうか}独法科に入学しました。卒業後、裁判所検事、司法省参事官、東京帝国大学講師等を務めながら、刑法に関する研究を続け、『改正日本刑法論』や『刑法大要』という本を出版しました。また、少年犯罪や陪審員制度にも関心を持ち、未成年の保護更正をめざす「少年法」の制定に向けて尽力しました。これらは、現在の法律制度に大きな影響を与えています。

泉二氏は、昭和11年61歳のとき、^{だいしんいん}検事総長、昭和14年、^{すうみついでん}現在の最高裁判所長官に当たる大審院長に就任し、退官後は天皇の相談役である枢密院顧問官に任命され、太平洋戦争後は、弁護士として司法における人権保護を訴え続けました。人情家であり、「大島郡奨学会」を設立し、郷土出身者の援助に努めるなど、郷土奄美のために貢献されました。

次に、^{うしぐま}昇曙夢氏は、明治11年、^{か け ろ ま}加計路麻島西端の^{しば}芝で生まれました。本名は直隆、^{な お た か}幼名を牛熊と言います。芝は学問に熱心な集落で、子どもたちが鍛えられる中、直隆少年は、めきめきとその才能を伸ばし、明治25年、当時奄美に2校しかなかった高等小学校

の一つに入学します。卒業後、鹿児島県の師範学校、今の教育学部を受験しますが、合格できませんでした。初めての挫折です。しかし、この挫折があったからこそ後に偉大なロシア文学者となり、奄美民俗学の研究者になれたのです。直隆は、この挫折をバネに神学校に進学してロシア文学に出会い、ドイツ語専修学校、早稲田の文学部でも学びました。

神学校卒業後、神学校や大学、陸軍士官学校などの教員となり、新聞社や政府機関の職員となりながらロシア文学の翻訳を続け、紹介された本は数十冊にもなります。また帰郷するたびに、奄美のすばらしさに気づかされた曙夢は、奄美の歴史や文化を研究し、世の中に発表しました。その中で、昭和21年、奄美群島は、日本から切り離され、米軍の統治下に入りました。郷土愛に燃える曙夢は、昭和24年『大奄美史』を刊行し、奄美の人人に誇りと勇気を与え、東京における復帰運動の支持者として献身的に尽力されました。昭和31年、81歳で亡くなりますが、故郷奄美への思いは尽きなかったそうです。

最後は、文 英吉氏です。明治23年、三方村大熊^{みかた だいくま}、現在の奄美市名瀬大熊^{なぜだいくま}で生まれました。幼少^{はたち}の頃から読書を好み、郷土芸能にも興味を持ち、三味線を習い始めます。明治43年二十歳のとき、日本陸軍に入隊し、除隊後、鹿児島県巡査や大島支庁職員を歴任しました。

大正11年32歳のとき、大島朝日新聞に入社、以後ジャーナリストとしての生活が始まりました。翌年、同じジャーナリストで思想家の武田信良氏と出会い、政治運動に関心を持ち始め、新聞社を退社し、昭和2年、大阪で雑誌『新大島』を出版します。そして執筆活動을続けながら「奄美振興同志会」を結成し、奄美における貧しい人々のための解放運動に乗り出しました。また、そのかわら奄美の芸能研究にも取り組み、昭和8年、奄美民謡の一大歌集というべき『奄美民謡大観』を刊行しました。昭和10年、大島朝日新聞に戻り、郷土研究雑誌『南島』創刊し、郷土史の研究にも打ち込みました。

太平洋戦争後の米軍政下時代は、臨時北部南西諸島政庁の職員となり、文教部を経て当時の奄美博物館主事、奄美図書館館長を務めました。さらに、奄美大島日本復帰協議会副議長として、泉 芳朗氏とともに復帰運動をけん引しました。日本復帰後は、奄美日米文化会館館長に就任し、奄美の伝統芸能の研究だけでなく、歴史・民俗資料の整備に力を注ぎましたが、昭和32年、66歳で惜しまれながらその生涯を閉じました。

文氏には、いろいろな著作がありますが、中高生に読んでほしいのが『野茶坊物語』です。社会的弱者として誕生し、周りの人々や家族にまで冷遇されたため、奄美の自然の中で一人たくましく生きていく野茶坊。田畑や家を荒らしたり、乱暴をはたいたりするので、人々に恐れられ誤解されますが、自分を理解してくれる人間には心優しく報いることのできる誠実な人物だったのです。しかし、そんな野茶坊が・・・というお話ですが、現代の世相にも通じ、深い人間愛を感じさせてくれる物語です。

さて、夏休みもあと1週間ほどになりました。夏休みの自由研究が未完成の人はいませんか。まだの人は奄美図書館で、郷土の偉人に関する本を読んで研究してみてもどうでしょう。今日紹介した3人のほかにも、奄美の農業や大島紬、漁業、海運業、文化、経済界においてめざましい活躍をされた郷土奄美の先人がたくさんおられます。ぜひその方々の生き方を学び、これからの人生の目標にしたいものです。わからないことがあったらカウンター^{としよかん}の司書に何でも聞いてください。涼しい学習室も開放しています。県立奄美図書館^{けんりつあまみ}でした。

